

随想



守礼之邦

— (沖繩紀行)
渋谷 幽哉

私は那覇国際空港に降り立って、Kさん宅に電話した。聞きおぼえのあるKさんの声が直ちに帰って来た。「ええ熊本からですか」「いや那覇空港からです、国体ですよ」「前もって連絡して頂いたらいいのに、そこを動かないで待っていて下さい。すぐ迎えに行きます。」正直なところ私はホッとした。やれやれ、これで未知のところであろうつかないでむと……。やがて戦時中私宅に疎開しておられた頃小学生だった御長男が運転された車にKさん御夫妻が乗って見えた。懐かしい出会いだった。双方しばしば絶句。Kさんは「よくいらっしやいました。お一人ですか、お母さんを連れてくればよかったのに」という言葉につづい

て私の家族の消息について矢つぎ早の言葉がそれこそ喉を切ったように飛び出した。車でKさん宅に向う途中も休みなく。私は外を眺めながら、かねてマスコミによる知識があったが、まさまじと見る基地の島沖繩に複雑で強烈な印象を感じながら一つ一つ受け答えをした。Kさん宅で心づくしの昼食を頂いた後、御好意に甘えて南部戦跡の巡拝に出かけた。御長男の運転でKさんの案内である。心のこもった説明が胸にしみる。「ひめゆりの塔」に花束をそなえ、往時のセーラー服姿の清純な乙女らに黙祈をささげ、牛島中将終焉の地に詣で、火の国の塔に礼拝した。寸土にいたるまで戦火に洗われた様子を詳細に聞きながら今は亡き同胞の叫びを聞き及がした。すでに戦争を忘れ果てた内地とくらべ沖繩の戦の跡はまだ鮮烈に生きている。このことを知らねば沖繩は理解できないと思った。

夕方近くホテルに着いた。翌日開会式がすむと、U氏が北部の案内を申出られた。立派に成人された御長男の運転でU氏御夫妻の案内である。U家もやはり私宅に疎開された御家族である。北部の東側はいわゆる沖繩そのものを感じさせるが、西側は開港近代化の最中である。自然と開発の二者択一を迫られている沖繩の苦悩がそこにあるようだ。昨日からの十時間近くのドライブで沖繩を一通り見せて頂いたが、私はその十時間の重みよ

りも御両家の方々の御厚情が身にしみて重かった。滞沖三日目の夜Kさんの発起で、小生宅に關係のある御家族十数名の方々が私のために歓迎をかねて謝恩の集いしようということになり那覇一流の料亭に御案内を頂き大変な御馳走と琉球舞踊の御接待をたまわったが、その席上Kさんが立って「三十年前、私達の家族は戦時疎開で大変お世話になった。ほんとうに親身も及ばぬ御配慮を頂いた。私達が今日あるのもそのおかげである。これ位のことでは御恩返しが出来たなど夢にも思っていない。御恩は終生忘れないように……。」という意味の御挨拶をされた。私は恐縮して身の縮み思いがした。私はあの頃出陣中であつたが、父や母が一体どれ位御世話が出来たろうか、恐らく充分には出来ていない。にも拘らず……。帰熊の前夜夫々の御家族の人々が各々御土産をもってホテルに私を訪ねられ空港出発時には御家族の方々が離陸地点近くに並んで手をふって見送って頂いた。私はまさに今様浦島にでもなつたような気持で帰路についた。「守礼の門」は今や觀光沖繩の象徴かもしれぬ。然しその門に掲げられ「守礼之邦」の扁額は、まことに義理堅い、礼儀正しい、恩義を忘れない沖繩の人々の心の象徴として今もなお私の胸につよくやきついている。沖繩は復帰して沖繩県となつたが、私にとってはいつまでも「守礼之邦」である。

(専妙寺住職)

浅川わたる

— 一瀬 幸子

季節になると私は蕪村の句を思い出す。

夏河を越すうれしきよ手に草履
この句には「前に細川のありし潺湲と流れれば」と前書がある。まぶしいばかりの陽の光を浴びて手に草履を持ちながら喜々として夏河をわたる蕪村の姿が眼に浮ぶ。

浅瀬、浅川は蕪村の好んだ素材である。

みしか夜や浅瀬に残る水の月
短夜や浅井に柿の花を汲む

浅河の西し東しす若葉哉

みしか夜や足跡浅き由井の浜
月見舟きせるを落す浅瀬かな

浅瀬、浅川によせる心は又、それを踏

みわたる喜びでもあつた。

秋雨や水底の草を踏みわたる

ぬけかけの浅瀬わたる夏夏月

我影を浅瀬に踏すすみかな

ちか道や水ふみ渡る車馬

さみだれや水に銭ふむ渡し舟

しつかさや清水ふみわたる武者わらし

こからしや野河の石をふみわたる

古河をふみわたる身にしくれかな
これらの句の殆んどが安永年間、蕪村五十歳から六十歳にかけての句作である。

この頃の蕪村は詩、画ともに円熟してゆく時期にあつたが、又、一方心身ともに急に疲労の目立ちはじめた時期でもあつた。「愚老とかく風塵にくるしみ」「当年は悪星の障得に候や、夏秋を終て病に犯され」「愚老義去年中より当春へかけ長病」とあつて、安永五年九月には「老懐」と題して「去年より又淋しいぞ秋のくれ」と詠んでいる。そして安永六年春興帖「夜半楽」を發行、その中に「さめる「春風馬堤曲」は「やるかたなき」懐旧の情を幼年の日の記憶に托して詠んだものである。

やふ入や浪花を出て長柄川
春風や堤長うして家遠し

「余幼童之時、春色清和の日には、必友たちと此堤上にのぼりて遊び候。」とのべた毛馬堤の思い出は、川渡りを楽しんだ幼い日の遊びとして蕪村の心に甦えるのである。

この頃、うめ、小糸という女性との交渉があつたことが書簡により知らされるが、浅瀬、浅川によせる心は、老年期に蕪村を襲った回春の情と、懐旧、郷愁の心が、若き日の現体験としての「浅川わたる」句作りを意識させたと思ふべきで

ある。そして「浅さ」によせる心は更に次のような作品へと結集するのである。

足よはのわたりて濁るはるの水
しのめや鶴をのがれたる魚浅し
すし桶を洗へば浅き游魚かな
不二ひとつつみ残してわかばかな
雨後の月誰ソヤ夜ふりの脛白き
(熊本女子大学助教授)

ある朝・車の中で

堀川 喜八郎

「制限速度が変わつたですタイノ」
乗車のあと、ずつと無言でハンドルを握っていた運転手が、はじめて、それも独りごちのような口調で口を開いた。顔は前方に向いたままなので、瞬間、誰に話しかけたのかといふかたが、このタクシーには私だけしか乗っていない。自分話しかけたことに気づき、何とか返事しなくてはと思つたものの、発言の意味を解しかねてとまどっていると、つづけて言った。

「今まで五十キロだったところが、四十キロになつたつです。表示もちゃんと書き変えてあるですよ。ばってん、誰ひとり守らうとせんとですタイ。」
「ああ、そうですかノ」

「さっきから、どんどん追い越して行くでしゅうが、お客さんの気にしとんなはらんかと思つち。わたしゃ、ずーっと制限速度で走つとつですよ。そりば、よそんなタクシーがどんどん追い越して行くもんですけん。」

「いいや、ぼくはちつとも構わんですよ、安全運転で良かです。急いどらんですから。」

「そんなら良かですばってん。なかにや文句言うお客さんも居らすとですタイ。」

そのため、客が黙って乗っている場合でも「老いばれ運転手が、ノロノロ走つとる」と思つてはいないかと、気になると言う。この運転手は個人タクシーである。長い間、どこかの会社につとめた上での個人営業であらう。律義そうな態度、話し振りに好感をおぼえて車内を見回すと、愛車らしく手入れが行きとどいている。タクシーに乗っていつも気になる煙草の吸殻入れを、そつとあけてみるとこれもきれいに掃除してあつた。

「ぼくは自分で運転しないもんですから。制限速度の変つとるとも知りませんでしたよ。だいたい、ぼくは車に乗つたら車任ですから、ラッシュでもヤキモキせんようにしとります。あーたも制限速度で通した方が良かです。ひとのことはあまり考えんで……」

と言っているうちにも、タクシーやマイカーがすいすいと追い越していく。なるほど、運転手にはこれが心外であるに違いない。せつかく自分が交通法規を守り忠実に走っているのに、ほかの車がこれ見よがしに追い越していくのだ。

「そりがですタイ、時にゃ、よしノて思う時があつとですよ。ばってん、たまにそぎやんする時イ限つて、ブテですもんね。用心せんと。フの悪かときゃ、そぎやんもんですばい、この世の中は……」

運転手は、あきらめきつたようにそう言つて、苦笑したようだった。左後方の座席にいて、彼の横顔が引きつるのを感じたが、私はもうそれ以上、付け足す言葉がないような気がして黙っていた。視線を窓外に向けると、ぎつしりと並んで走る車のむこうで、街路樹の緑が朝日を浴びて、キラキラと輝いていた。

(燎原主宰・詩人)

